

<p>タイトル</p>	<p>2024 年度 学校推薦型選抜 共同教育学部 教育人間科学系 教育心理専攻 小論文問題</p>
<p>評価の ポイント</p>	<p>「上手な勉強の仕方がわからない」という児童生徒について、小学生～高校生を対象とした調査データをもとに、過去4年間の傾向を読み取り、そういう結果が得られた理由を考察して述べる問題である(600字)。 出典:東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究「子どもの生活と学びに関する親子調査2022」 https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=5855</p> <p>評価のポイントは下記の通りである。 (1)結果から読みとれることとして、「調査年や学校種に関わらず共通している点」を述べている。 (2)結果から読みとれることとして、「調査年や学校種によって異なる点」を述べている。 (3)上の二つの観点が整理して記述されている。 (4)そういう結果になった理由として、説得力のある記述がされている。</p> <p>解答例</p> <p>この結果から、どの年度でも、小学校よりは中学校、それよりは高校の方が「勉強の仕方が分からない」割合が高いことが読み取れる。校種が進むにつれて学習内容が多岐にわたり、また、それぞれの内容が詳細で深いものになっていく。その結果、小学校で通用した勉強方法が中学では通用せず、中学で有効だった勉強方法が高校では有用しない、ということが起こる。そのため、校種が進むにつれて「勉強の仕方が分からない」ことになるのだろう。</p> <p>次にどの校種でも、この4年間で、「勉強の仕方が分からない」割合が、増加していることが読み取れる。この4年間は、コロナの影響でこれまでとは異なる授業形態になったことや、タブレットを活用した授業が増えてきたことなどの変化が、学校で起こった。教員はそれに対応するように試行錯誤や工夫を凝らしているが、その変化に児童生徒が対応し切れていないのではないだろうか。</p> <p>一方、4年間で「勉強の仕方が分からない」割合が増加した程度は、高校より中学、それより小学校の方が大きい。小学校では4年間で20%近くも増えている。受験があると教える内容、学ぶ内容がある程度決まっており、新たな授業の工夫がしにくい。小学校ではその工夫がやりやすい。それだけに、新たな工夫に対応しきれない児童が増えたのではないだろうか。また自分なりの勉強の仕方が固まっていない小学生だから、一層、変化に対応しきれないのではないかと考えられる。</p>

<p>タイトル</p>	<p>2024 年度 学校推薦型選抜 共同教育学部 教育人間科学系 教育心理専攻 面接問題</p>
<p>評価の ポイント</p>	<ul style="list-style-type: none">・ 志望動機，教育や心理学に対する興味関心についての質問に対し，的確に自身の意見が述べられているか。 ・ 自身の回答に対する面接者からの追加質問に的確に応答できているか。